Title	đ №∏ ”　　，ω̃ ‘ ⁴　　＝ ´ ”　　9　　đ №∏ ”　　”
Author(s)	+
Citation	2012 年度　博士論文　要旨
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4627
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2013 年度

博士論文[要旨]

（指導教員　片柳榮一教授）

ゴッホの手紙における暗示的色彩と光の諸相

―画家ゴッホの宗教性の一断面―

聖学院大学大学院

アメリカ・ヨーロッパ文化研究科

（博士後期課程）

学籍番号　110DC004　松田寿美子

ゴッホの手紙における暗示的色彩と光の諸相
――画家ゴッホの宗教性の一断面――

要旨

第1章　幸福なるたそがれどき

画家フィンセント・ファン・ゴッホ(Vincent Van Gogh, 1853―1890)は弟テオとの間に膨大な手紙をやり取りしている。その手紙は、ゴッホがオランダのハーグで画商として勤務した 1872 年から、ゴッホがフランスのオーヴェールで息を引き取るまで続けられた。ゴッホは、手紙を書く場合も絵を描く場合も、彼の心の中に生まれつつあるものを表現しており、ゴッホの内奥の感情が盛り込まれている。ゴッホの内奥の感情は、宗教に対する彼の関わりによって深く影響されている。よって、ゴッホ研究において、これまで見過ごされがちであった、ゴッホの内奥の宗教的感情の側面に着目して考察を行うことを、本論文の主眼とした。

ゴッホの手紙を読み進めて行くと、初期のものから死の直前のものまで、「朝日」、「日中の太陽」、「夕陽」、「水面に反射する光」、「星光」、「月光などの自然の光」、「ランプの光」、「暖炉の光」などの自然と人工の光や何かの比喩としての光など、さまざまな種類の光の記述が見受けられる。牧師になるための勉強をしていた時のゴッホの目に映る光、また画家になってからの画家の目としての光、ヨーロッパ北部のオランダの光をはじめとして、ベルギーの炭坑地帯の光、多くの芸術家が集うフランスのパリの各画家の光の描写、そして陽光あふれる南フランスのアルルの光まで、ゴッホは光をどのように捉えていたのか、ゴッホの光とは何か、その光に象徴されるものは何であったか。

本論文第 1 章は、ゴッホの手紙における光の記述に着目して、ゴッホは、光をどのように捉えていたのか、考察を行った。弟テオと手紙を交換しはじめたハーグ時代の 1872 年 8 月より、炭鉱地ボリナージュで伝道活動を行った 1881 年 4 月までの初期の手紙に限定して論じた。

ディケンズが「幸福なるたそがれどき」と呼んだことをゴッホは理解していた。「幸福なるたそがれどき」は、闇が迫り来る時に、その闇の中そのものに「別の光」を見ること

である。病人や死にかかっている人たちは、苦しみと悩みの闇夜に光を必要とする人々である。また炭坑夫も自然の光が欠けた暗闇の中で、死と隣り合わせに仕事をする人々である。それ故、彼らにも闇の中そのものに「別の光」を見ることが不可欠であると、ゴッホは理解していた。ディケンズの「幸福なるたそがれどき」に深く共鳴したゴッホは、そのことを手紙で弟テオに書き送った。

第２章　ゴッホの素描

ゴッホが画家として絵を描いたのは、２７歳から３７歳で亡くなるまでの 10 年間であった。その１０年間で、素描を約１１００点、油彩画を９００点、制作した。

第２章では、ゴッホの絵画の中でも素描に着目して、ゴッホが何を見出して何を描いたのか、なぜ、絵を描くのか、その使命感とは何かを、考察した。

画家を志してから、ゴッホがひたすら取り組んだのは素描であった。それは、正攻法で美術を勉強していないゴッホにとって、苦しい道程であった。しかし、人物や風景をみつめるゴッホの眼差しは、父や叔父と同じ牧師への道を志していた頃と同様の、貧者や弱者への暖かな眼差しを基底とするものであった。

牧師の家に生まれ育ち、ゴッホ自身も牧師を志して挫折し、画家としての短い生涯を終えたが、このことは、ゴッホにとっては、決して大きな人生の方向転換だけの意味をもったものだけだったのではなかった。また、信仰のために生きるのを捨てて、信仰とは違う何か別の事柄を模索して、画家になったのでもなかった。ゴッホにとって、画家としての道は、牧師になり伝道活動をすることを諦めた、もう一つの道なのではなく、福音を説くことと全く遜色のない同じ思想を生きることであった。

第３章　「馬鈴薯を食べる人々」――打ち震えるような光――

ゴッホのオランダ時代の中で、ドレンテとヌエヌエネンで過ごした時期は、ゴッホ初期の作品の中でも最も重要な大作「馬鈴薯を食べる人々」が制作された時期である。

第 3 章では、「馬鈴薯を食べる人々」でゴッホが表現しようと試みたものは何か、「馬鈴薯を食べる人々」を制作するに至ったゴッホの心情はどういうものであったか、ゴッホ自身が「自分と弟テオの二人にはピューリタンとの類似性がある」と述べているのは、どう

いうことであるのか、に着目して論じた。

オランダ時代の最大の代表作である「馬鈴薯を食べる人々」をはじめとして、ゴッホは、オランダを後にしてフランスで自らの命を絶つまでに、「大地の上で働く農民の姿」を描いている。ゴッホは、生涯にわたって、働く人々、その中でもとりわけ農民への深いまなざしをもっていた。それが、自然のなかで労働し、その労働の結果、生活の糧を得た馬鈴薯での貧しい食事の光景に凝縮されたのである。

思索と行動の両方を伴って生きることは難しいものであると、われわれは捉えてしまいがちである。また、われわれは、物事を深く思索する人物は、通常の常識を無視するエキセントリックな人物であるという偏見に陥りがちである。しかし、思索と行動の両方を伴った稀有な存在が、ゴッホの考えるピューリタンであり、そして、ゴッホにとって学ぶべき存在としてのピューリタンの姿であった。

ゴッホの「馬鈴薯を食べる人々」は、全体的に重たく暗い画面である。それは、ゴッホが試行錯誤をして、「赤、青、黄」の三原色を基本として、「ヴァーミリオン、紺青、ネーブルル・イエロー」のような色彩を作りだし、「馬鈴薯を食べる人々」で描きたかった主題に、それらの色を使用したからである。つまり、色の彩度を感じさせることなく、明度を最も表現することで、暗い画面の中に対象を浮き上がらせようとしたからである。このことから、ゴッホがいかに色彩について研究していたのかが理解できる。

第４章　南仏へ――「躍動する色彩」を通して永遠なるものの暗示――

これまでのところでは、第２章でゴッホの素描、第３章で画家としての前半期のゴッホの最大の構成図である「馬鈴薯を食べる人々」をそれぞれ題材に、ゴッホの思想を論じてきた。第４章では、画家としての後半期であるアルル以降の代表作である、「向日葵」「種まく人」「海景」「星月夜」の以上４点とそれらに付随する作品を取り上げて、ゴッホの思想を論じるとともに、ゴッホが追求した色彩理論についても明らかにした。

ゴッホの絵画は、一見して聖書の場面を連想させるような絵画ではない。しかし、ゴッホの描く日常の現象やさまざまな生活用品などのモティーフ、そして風景やその中に配置されている人々などを見れば、ゴッホの作品は、ゴッホの思想、すなわち信仰が起点となって生み出されたことが解る。たとえば、「種まく人」「海景」「荒野や平野、畠」「星月夜」

には、ゴッホの信仰の核となるものが表現されている。ゴッホにとって、信仰こそがすべての作品の起点であったのである。

ゴッホは、アルルではドラクロアから学んだ補色の色彩理論をより発展させて、ゴッホ独自の色彩理論を確立した。ゴッホは、補色を点描でカンヴァス全体に表現することによって、「象徴的な色彩」、「暗示的な色彩」を描いた。ゴッホは、このような色彩で、かつては輪光として表現されていたものを、命や物事の継続性や永遠性を表現する、「光の輻射」によって暗示したのである。「光の輻射」は、「馬鈴薯を食べる人々」で表現された、「打ち震えるような光」にも通じるものである。

第 5 章　ゴッホの生と死

ゴッホが弟テオと手紙の交換を始めた初期の頃から、「死」についての記述はしばしば見られる。それは、ゴッホの友人や知人の死、または見知らぬ人の死、父や叔父などの親族の死ついての記述である。また、人生とは何か？　死するとはどういうことか？などの哲学的自問自答の思いを、弟テオを始め芸術仲間などに記した手紙である。

ゴッホにとって、「真に永遠的なもの」が死であり、われわれの心を慰め豊かにするものである。死をもって、その人間の人生が終わるのではない。ゴッホにとって「死」はそのことの恐怖に恐れおののくものではなく、永遠的なもの中の一つの点に過ぎなかったのである。

ゴッホは、日中の日の光が暮れて行くときこそ、自然の光ではない別の光があることを認めていた。自然を媒介として神と対話することが、信仰、すなわち宗教であると、ゴッホは捉えていたのである。ゴッホの絵画には、直接的に聖書の場面を描いているような作品は見受けられない。しかし、素描を始めた頃から画家としての初期の代表作である「馬鈴薯を食べる人々」まで、モノトーンの画面の中で描いたものは、「光」であった。また、アルルでの後半期は、色彩あふれる作品を描いたが、それらの色彩を通して描いたのは「光の輻射」であった。ゴッホ以前の画家たちが輪光として描いたものを、ゴッホは「光の輻射」で表現した。ゴッホが画家として生涯を通じて描いた作品は、宗教画であった。

聖学院大学大学院
アメリカ・ヨーロッパ文化研究科
（博士後期課程）

学籍番号　110DC004　松田寿美子